

## 二月作品

## 月集スバル

☆今月の四人☆（桑原正紀選）

一人笑ひ

高野 公彦 千葉

芯暗き夕雲見つ思ふこと人老いやすく歌成りがたし  
（階段は鈍器）と若き日に思ひ今また思ふ下りが恐し  
無防備なにんげんの顔親しけれ欠伸するときくしやみするとき  
年取れば何でも嬉し冬の宵おでん食べつつ白ワイン賞<sup>め</sup>づ  
独り居の長き一日<sup>ひとひ</sup>のその果ての一人笑ひが今日<sup>けふ</sup>のわが生

時埋める声

影山 一男 千葉

今治のタオルのやうな秋の日よ東京歌会本日再開  
三年の空白の時埋めゆける声はやさしも歌読むこゑは  
月蝕の夜の眠りに性のことはかなく思ふ老人のボク  
古希の身に五度目のワクチン注射打つ死への覚悟はまだ持てなくて  
ボルシチはロシア料理と思ひぬし七十歳はけふも昼寝す

良い妻風に

水 上 芙 季 神奈川

宅配便つぎつぎ届きかんじんの夫がなかなか帰つてこない  
冷気纏つたコバルトブルーの瓶のなか新濁の酒「雪蔵」たゆたふ  
柿をただ剥くのではなく燕と和へ甘酢漬けにす良い妻風に  
冬の雲満ちて十九階のわれは地下へ行きたくなる帰りにくくなる  
お土産のぶどう食みつつ大菩薩嶺の稜線の話する夫

埠頭の犬

大野 英子 福岡

建設中の十四階のビルの上<sup>へ</sup>の秋をかがやく鴉飛びゆく  
短き脚をすつと伸ばして夕焼を見てゐる埠頭のダックスフント  
蓋をずらし明るい外界があらはれて私を照らす日暮れ三日月  
月食を終へたまんげつすつきりとひと皮剥けたやうな明るさ  
ハンドベルをさらふ音色が聞こえくる教会は冬を呼び寄せてゐる

☆

☆

水島晴子 兵庫

森重香代子 山口

つと笑みて夕べの径を駆け去りしけものことは誰にも言はず  
目の下の路あゆみをり豊かなる金茶色の毛並もろに見えをり  
巢にかへる足どりならむ夕闇にまぐれざる背のゆくらゆくらと  
遠くもの黒きに浸りつらなれる高層の群れがらくためけり  
翼ならば爆撃機ゆく映像がかの空襲の時間よびもどす

武田弘之 神奈川

日影康子 富山

庭の土盛り上げて行くもぐらたち現れ出でよけふは小春日  
お好みの缶ビール供ふ「無」の一字大きく彫れる墓石の前  
詐欺電話を通報せしが警察に疑はれたる変な秋の日  
高々と皇帝ダリア咲くさまを胸張り仰ぐ背低きわれは  
庭中に熟れたつ袖子を採りゆきて五十となれる今日のごび

奥村晃 作\* 東京

故古屋祥子 群馬

金ボタン紺のジャケット勧められ気に入ったKent Ave  
ズボン買いに来たる売り場で勧められジャケットも買ったKent Ave  
晩年を愉しむために壮年われ碁会所に通い囲碁を覚えた  
先生は居ないし囲碁は実践を愉しむのみの我を肯う  
色々な歌会があちこちにありまして縁あればどれも体験す我は

手の平につもれる程の錠剤を日々呑むなれど回復をせず  
娘が活けて帰りし壺の木犀がほろりと黄花香しはじめぬ  
棟瓦跳ねつつ歩む山鴉ひとり遊びのながき秋の日  
冷蔵庫の上につしか位置占めし漢和字典折りに開くも  
岩波の「図書」読みをれど見開きの漫画の意味が全く不明  
来る人のあらねば秋草の天下にて土蔵の裏手に朴落葉つもる  
白内障術後の目をばしばたたく庭に群れ咲く石路の黄に  
仕事終へ帰る庭師ら見送りて木の間にかかる半月仰ぐ  
皆既月食ゆつくり見よと大窓の前に家人が椅子置きくれぬ  
晴れわたる秋の夜空の天体シウ皆既月食赤銅色の月  
黄の公孫樹、みどりのいちやう、散り際の公孫樹もまじる朝の歩道に  
刈り込める満天星まさにもみぢいろ紅また黒を少し加へて  
雲ひとつあらぬ大空くきやかに赤城、榛名の稜線が見ゆ  
水面の澄みわたる碧さ、照れる陽に乾きたる石いづれも鮮明  
対岸は景見するために川に向く洒落た住宅数多建つなり

桑原正紀 東京

小島ゆかり 東京

小豆島のあかるき光さすやうなやぎあきらさんの百歳のうた  
選歌しつ力いたたくことのある立ちて厨にみづ飲みにゆく  
甘えずに生きることにたいせつを思へり秋夜冷ゆるしじまに  
あこがれの海のかなたへ還りたるいちにん下村光男おもほゆ  
綵に住み子をなして上総かづさと名づけたる下村光男群むねを嫌ひき

狩野一男 東京

木畑紀子 京都

定義にもよるが、世界にヤ七千におよぶ言語があるとぞ。立派  
先づアウトブレイク次にエピソードしてそれからパンデミックへ  
空しさよ霜月のこの虚しさよこころよきまでむなし霜月  
十一月十日、この日は、俳優の高倉健氏の命日なりと  
生きづらいのは覚悟して生きゆかむへ弱者男性老人へのわれ

宮里信輝 神奈川

島田暉 神奈川

核を持つロシア、中国、北朝鮮 核を持たない日本のめぐりは  
仲がよいロシア、中国、北朝鮮 日本は次のウクライナかも  
中国の習近平は目差すなり 「台湾」併合しひとつの中国  
隣国の超大国のロシアより攻めこまれたるああウクライナ  
方向は日本を向けりロシア、中国、北朝鮮の核ミサイルは

ふんすいの空ひび割れてスマホ見る人のうしろに鳩が近づく  
空青しだけかわからず人恋し冬のスクランブル交差点  
スクランブル交差点、青 こめかみに冬の空気が攻め込んでくる  
捨てどころなくてしばらく持ち歩く空き瓶のなかの冬のゆふやみ  
今宵また鳥インフルのニュースあり袋が胸に埋め込まれつつ

箒もつ一休さんが駅前立つ町わが住む京田辺市は  
この町に老いてやうやくあさゆふに門先を掃く慣ひ身につく  
鋭とき声に鳥啼き白き尾の獣はしれり秋の天神社の森  
社やしろ建て目にはみえざる天つ神むかへ祈りき遠つ世のひと  
人はみなホモ・レリギオースス天を仰ぎ天を待めり昔も今も

夕闇に百合の花びら白く揺れ人のたましひ蠢うごめくごとし  
鳥眠る檜の大樹の葉がくれに夢まかななる鳥声もれる  
深々と夕日を没れて西山は茜に染まる光の器  
おとろへしわが体力に似たる樹や葉のなき冬は花を飾らむ  
朝早く花開かむと夕しほむ朝顔の花なにかいとしき

大松 達知\* 東京

小山 富紀子 京都

はちみちゅ、とこっそりこっそり口で言うくすくすたくて癒されている  
そうだねと思わぬままにそうだねと応えて会話ひとつ乗り切る  
学校教師われに向かつて娘言う学校なんてなくなればいい  
平家屋ベテルギウスのその意味は、じゃじゃーん、巨人の脇の下です  
ヒノキとは(日の木)であると父は言い小ネタで草といまさら娘

田宮 朋子 新潟

清水 正子 神奈川

宮林墓地に落ちるし水楡のどんぐり部屋でシャツポを脱ぎぬ  
水槽の二尾のめだかは雌のはずこの稚魚一尾いづこより来し  
まつたうな人の貧困ふゆる世に(清貧)は死語となりゆく気配  
苞として卓上にありブータンの冬虫夏草入りのはちみつ  
越後の国玉果村の古民家で干し柿つくる媪となりぬ

津金 規雄 神奈川

小嶋 一郎 佐賀

ローマびと熱狂しをり人と人が殺し合ふさまコロセウムに観て  
すべからく民は移り気その民のわれも一人ぞ時空をへだてて  
噴水を濡らす驟雨に乙女らも声あげ駆けだす敷石のうへ  
くびれなき豊かなる腰ひねりたるヴィーナス像よ声を聞かせよ  
七代目のクレオパトラの鼻隆し美貌は歴史を変へるや今も

月食の時を待つらしあの窓もあのペランダも常見ぬ人影  
いにしへは怖ぢて見ざりし月食を仰ぎてはやす令和のわれら  
月食の始まる利那み堂なる月光菩薩の裳裾そよがむ  
月食の月睨みつつ仁王像遠き記憶をたぐりてをりぬ  
これ見るは四百二十五年ぶり星食らふ月あふく山姥

おもひなし空のまほらは蒐いろ詩語がこぼれてきさうで見上ぐ  
太陽系いでて深宇宙ゆくボイジャー余命五年でなし得るは何ぞ  
ボイジャーが見たる小さな青い点(地球)に目覚めて今日も散歩す  
走行車にぶつかりながら道よぎる蝶にはあらむ急ぐ理由が  
生き急ぐわれにあらねば立ち止まりご近所さんと会話たのしむ

カーテンを閉めつつ気づくさうだつた照りある月は「この月の月」  
人の目の好みに合はせ剪られゆく園の楓よわりなるべし  
雨ののち勢ひの増す芥子菜を間引く一瞬こころ鬼にす  
ようこそと食卓に這ふ黒蟻としばし付き合ふ逃がすなけれど  
三日後の期限書類を投函し戻る一〇〇〇歩の生きある証

後 藤 美 子 北海道

風 間 博 夫 千葉

日々に変わる目交ひの山の秋の色くもれる朝の重き樺色  
冬近し頬に触れて逸れし一匹の雪虫あをし初雪近し  
予報欄に雪だるま登場窓ガラス結露びつしり霜月に入る  
去年雪が多かりしゆゑか十月に簡易除雪機品薄といふ  
使へない表現(見える化、心が折れる、黙食、ほつこり)そして(なのでえ

福 士 り か 青 森

田 中 愛 子 埼 玉

綿の花五、六片つく枝一枝かざればここが冬の入り口  
この冬が終はるころには琥珀いろになるとふ今はましろき綿花  
霜月はくらぐらと冬をはらみたり山におくれて里にゆきふる  
トリユフ香のポテト、ポルチーニ香のバスタ、うなぎの煙で飯食ふことし  
「自分へのご褒美」といふハードルの低き褒美もこのごろ無縁

藤 野 早 苗 福 岡

橘 芳 園 新 潟

もいろいろの舌もて猫の掬ひるる朝の素水の透きとほる秋  
ガムランの首色の似合ふネイルしてパスポート持つ旅に出でたし  
足腰の自由利かざる母の家傍若無人たり御器ごきかぶり囓  
かげりゆく陽にほの白し教会坂バス停に立つローマンカラー  
実直を一生の銘とし首太く鉄紺色に沈むゴイサギ

小数点以下は切り捨て、旅の恥掻き捨て、君の名前呼び捨て  
空き缶はポイ捨て、ライター使ひ捨て、靴は脱ぎ捨て、文は書き捨てた  
「捨ての付く良き言葉ありや捨て台詞、捨て金、捨て鉢、(捨て身はいいか  
歌一首つくらうと浮かびくる言葉その取捨選択は楽しほそみち  
題詠の題「捨」がこころ刺激して電子辞書引き歌を生みゆく

もの忘れ一丁目なりクリニックに行くこと忘れシチュー煮てゐて  
(ネタバレ)でハッピーエンドたしかめてゆつたりと見る韓国ドラマ  
しばしばも下がるマスクは気になれど追悼演説むねに沁みたり  
ロシアの女兒パリのお嬢さんイギリスの老婦人ああ をみな麗し  
喪中はがき書いて過ごせりあたたかな霜月のけふわが誕生日

智を越ゆるもの信じねば生きられぬ越後に親鸞七不思議あり  
ほとけさま、パワーストーン、僧の経、呪文、祭文にひれふす人々  
孤独とは見えぬ(宗教)の二人づれインターホンごしにこぼみぬ  
(無)や(空)の境地に縁のなく過ぎて歌つくるとき己を忘る  
経を誦む自がこゑ厭ひ僧の職辞めたることもひとりの怯懦

水上 比呂美 東京

〈宮柵ニマツプ〉を見つつ堀之内小へ案内する記念館館長

霜月の皇大神宮境内に残る茅の輪を風がくぐりぬ

少年の柵ニ先生顕ちきたる雁木の街並み秋空高し

宮柵二の墓前で大下一真氏「トラヤヤー」とおごそかに誦す

生まれぐにの此の山と川思ひけむ戦地の夜のひとりの兵は

鈴木竹志 愛知

生活のひとこまさへも文学になると錯覚す茂吉を読めば

この夜更けあれこれ浮かびくる雑事眠れぬままに片す術想ふ

午前三時目の覚めたればとりあへず今日なすべきを考へむとす

父母にいかなる無念のありしかと思へど浮かばぬ親不孝者われ

十一月朔日の前日は十月三十日ではないと確かめてをり

原賀 環 子 東京

空蟬にいちども触ることなくて、にいぜろにいに籠もり居の夏

大きさが左右でかなりちがふ靴 事故後を生きたフリーダの靴

大事故を負ひしからだで生きるとき負ひし心は画をかき始む

靴をもてからだを証し自画像でこころを証すフリーダ・カーロよ

フリーダの大ききリボンのついた靴 記事のしやしんを伝記にしまふ

松尾 祥子 東京

なにもかもさらけ出したるたらちねの老いの苦しみ老いの哀しみ

最晩年都度口にする母のこと質す氣力の失せて立冬、

栗をむくゆたかなる時なきままに紅葉すぎて木枯らしの吹く

誕生日祝はれし母は孫曾孫その会すらも夜には忘る

曾祖母の口調まねして四歳が「おぼけ」など言ひ額に手を当つ

奥村晃作歌集 令和4年7月刊 二五〇〇円(税別) 送料三〇〇円

象の眼 コスモス叢書第1213篇 六花書林

著者住所 〒175-0092 東京都板橋区赤塚七-151-16

鈴木竹志歌集 令和4年6月刊 二五〇〇円(税別) 送料三〇〇円

聴雨 コスモス叢書第1211篇 六花書林

著者住所 〒448-0047 愛知県刈谷市高津波町三-140-8